

国際シンポジウム「文化としてのゴミ」をめぐって

会期：2020年1月25日－26日

会場：名古屋大学文系総合館7階カンファレンス・ホール

笹川 萌

2018年4月に設立された名古屋大学の超域文化社会センター（Center for Transregional Culture and Society, TCS）は、その前身である「アジアの中の日本文化」研究センター（2013年4月－2018年3月）における日本近代文化や東アジア関係学研究を引き継ぎ、さらに広い知見を踏まえた上で人文学研究を発展させることを目的としている。TCSは人文学のみならず、社会科学や自然科学といった幅広い学術領域をも網羅することによって、常に最先端の人文研究学に貢献することがミッションだという。TCSが主催する学術イベントで行われる発表及びディスカッションを通して、参加者は国や地域を越えた視点を培い、様々な社会問題や環境問題の本質に向き合っていく。

今年開催された国際シンポジウムのタイトルは「文化としてのゴミ」（Waste as Culture, the Culture of Waste）である。去年の国際シンポジウム「国民・国家・食——食とアイデンティティの超域的な言説を求めて」のテーマ「食」同様に、「ゴミ」も生きている以上、生活の一部として常につきまとうものだ。そういった意味では「ゴミ」も普遍的な主題だろう。しかし、「食」と違い、「ゴミ」は近代社会の中で回避され、無視され、周縁化され、隠蔽されてきたと言える。故に、本シンポジウムでは「文化、社会、経済、政治、科学技術、環境」といった多様な側面が複雑に絡み合い、「豊かさと貧しさ、必要性和不要性、生産性

と無駄、生産と消費」などの矛盾や葛藤を併せ持つ「ゴミ」に焦点が当てられた。そうすることによって、文化・社会全体、そして最終的に「近代」を見つめ直すことを目指す。これを実現させるために、人文社会科学の異なる領域の研究者が国内外から集い、近現代の文化や社会における「ゴミ」の在り方について深く議論した。

初日はセンター長の飯田祐子氏の挨拶と藤木秀郎氏の趣旨説明のあとに、このシンポジウムの恒例である大学院生の企画による新世代パネル（午前の部）が設けられた。今年の新世代パネルのテーマは「クィア」だ。このパネルは「視点としてのクィア」を軸としている。「視点としてのクィア」とは「特定の性のあり方のみを『ノーマル』とみなし、それ以外の在り方を『逸脱』と位置づけ、他者化する考え方を批判的に検討する視点のこと」（菊野夏野・他、2019年）である。ジェンダーとセクシュアリティ研究を模索する過程の中で性規範を捉え直し、性と身体のあり方を問い直すことを念頭に、三名の大学院生がそれぞれの研究を発表した。加藤健太氏は「変態性欲にもとづく行為——旧映倫時代の日本映画におけるシー・キャラクター」について、孫旻喬氏は「手塚治虫のストーリーマンガにみるクィアな身体」について、そして門千行氏は「二重ルールの世界——『西遊記』改編コメディにおけるクィア問題」について、プレゼンをした。どの研究内容も映像学やマンガといったビジュアル・カルチャーを題材としたものだったため、それぞれのニーズに応じて映画のワンシーンが流れたり、漫画の一部が映し出されたりした。質疑応答コーナーでは、研究者の方々が直接大学院生に質問をしたりエールを送るなどした。将来的にどのように研究を深めて発展させるのか、大きな期待を寄せていることが見受けられた。

午後の部のセッションIでは「日常生活とゴミ文化」をテーマに、主に日本と中国の消費文化におけるゴミについて議論した。孟悦氏（トロント大学）は現代中国環境人文学の批評的モチーフをテーマに、環境問題そのものに



対する意識だけではなく、自らがプラスチックやホルモンや化学肥料を含む物質の生成において、被害者及び加害者であるという認識の重要性を主張した。胡嘉明氏(香港中文大学)は中国の若者の間で大ブームを巻き起こした中国茶という切り口から、現代中国社会で中国茶のプラスチック容器が何を象徴し、どのように消費されているかを論じた。ネイスン・ホブソン氏(名古屋大学)は戦後の日本における食とゴミを関連付け、日本政府が廃棄食品に頼ることによって、戦争の持続の可能性を見出していたことを示唆した。

二日目の26日の午前の部では、セクションII「ゴミへの(ポスト)人文的アプローチ」が設けられた。英子・丸子・シナワ氏(ウィリアムズ大学)は歴史的な観点から、主観的観念、社会的鏡像、物質的現実としてのゴミについて発表をした。シナワ氏の論点は、ゴミという概念は消費社会や資本主義によって生成されるものではなく、それらに内在するものだけだということだ。カール・スクーノヴァー氏(ウォリック大学)はゴミ管理の映画的手段について、レンズフレアというカメラ手法を始めとした、具体的なケース・スタディを挟みながら論じた。発表を通して、スクーノヴァー氏は映画とは、ゴミのマネジメントのインフラであると強調した。芳賀浩一氏(城西国際大学)は、木村友祐や玄侑宗久他、数多くのポスト3.11文学を取り上げながら、東大震災後の日本文学における、瓦礫・ゴミ・放射能等の廃棄物のエージェンシーに関する考察を披露した。芳賀氏は、ゴミが持つエージェンシーと人間の秩序形成の働きは基本的に相容れないと主張した。このセクションでは各プレゼンターが、人文学がどのようにエコロジーに有効な知見をもたらすことができるかについて模索した。

午後のセクションIIIでは「放射性廃棄物の現実と想像」をテーマに、環境社会学や科学技術社会論といった多岐にわたる観点から、ゴミについての新しいヴィジョンが見出された。土屋雄一郎氏(京都教育大学)は、衛生面や環境の悪影響から近所に建設されることが反対される施設、いわゆるNIMBYにおける環境紛争と合意形成について論じることによって、住民・自治体・政府の関係性に目を向けた。猪瀬浩平氏(明治学院大学)は埼玉県の見沼たんぼをフィールドに、戦後から原発事故までのゴミの歴史を探究した。最後の発表者、藤木秀朗氏(名古屋大学)は放射性廃棄物のドキュメンタリーを事例に、放射性廃棄物についてどのような想像がありうるのかに着眼した発表

を行った。藤木氏は、放射性廃棄物が全体のシステムから周縁化される傾向にあることを主張し、消費主義に警鐘を鳴らした。

今回のシンポジウムは人文的研究を中心としたプログラムだったが、それに限定されず、多様な学術領域に踏み込むことによって、幅広いアプローチからゴミについて考える機会が与えられた。特に、以下の三つの論点が活発に議論されたと考える。

一つはゴミの象徴とゴミによるアイデンティティーの構築である。ゴミという視点から近現代の文化や社会を紐解くことによって、ゴミが個人レベルから世界レベルまで、アイデンティティーの構築に大きな影響を与えていることが分かった。個人レベルの一例として、中国茶などの若者の消費文化において、ゴミとは逆に見せつけるものであり、若者の承認欲求を満たす役割を果たす。また、ゴミをどのように扱うかを、ナショナルアイデンティティーとして打ち出すこともある。例えば、日本特有の美德として強調される「もったいない精神」がどのように幼少期から植え付けられているか、そしてそれがどのようにナショナルアイデンティティーの形成につながっているかについても考察がなされた。このように、ゴミの様々なあり方と意味について濃厚な議論が行われた。

もう一つは人文学がどのようにエコロジー問題へ貢献できるかである。一般参加者も積極的に発言したこともあり、かなり白熱した討論へと発展したと言える。これに関しては、無限ともいえる想像力に働きかける文学における持続性の側面を照らし出し、文学の限界ではなく文学の可能性に論点をシフトすることにより、議論は収束に向かった。とはいえ、SF文学を引き合いに出した文学の限界をめぐるディスカッションも非常に興味深いものであり、意義のある論点であった。

最後に、ジェンダー学から見たゴミ問題についてである。セクションのあとは必ずディスカッサントがレビューとともに発表者に向けた質問を投げかけるのだが、ジェンダー的アプローチを求められることが多々あった。例として、戦時中、栄養価値の最も高い食品の部位を廃棄していることを強く非難する文が発表されたが、それは一般的に家庭的な役割を担う女性に向けたものであったと言える。この質疑応答を通して、廃棄物とジェンダーの結節点が浮き彫りになった。中国茶とミソジニーに関する議論も飛び出たが、中国ではそのような側面は見られないといった回答であった。日本と中国の社会における中国茶

とジェンダーの関連性の差が提示されたことによって、さらなる議論へと発展されることを期待したが、時間が足りず、それは叶わなかった。

今回のシンポジウムはあらゆる意味で自分にとって大変勉強になった。まず、学会発表に初めて参加したため、異なる研究分野を担う学者の方々がどのように「ゴミ」という共通のテーマにアプローチをするのかを間近に観れたのは大きな収穫であった。ディスカッションでは高度な洞察力と知識が求められた。

この二日間を通して「ゴミ」という観点から文化、社会、経済、政治、科学技術、環境等に関する幅広い見識がもたらされた。自分を含め、一般参加者の意見や質問にも真摯に対応し、分かりやすく説明して下さったプレゼンターの方々には終始、尊敬の念を抱いた。また、シンポジウムは日本語・英語の両方で行われたが、同時通訳を引き受けて下さった方々のおかげで、言語の壁を越えて、多くの研究者・一般参加者がディスカッションに加わることができた。「サステナビリティ」(持続性)という言葉が頻繁に耳にできるようになって、まだ日は浅いが、これらにまつわる諸問題はこれからさらに人類にとって必要不可欠の課題になるだろう。それに向けて、このシンポジウムに参加できたことには大きな意義を感じる。